「日々の理科」（第 1073 号） 2017（H29),-6,14

「サナギから羽化へ（３）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

自然の中で育ったアゲハの幼虫は、終齢の終わりごろになると、葉の上から幹に移動することが多い。不安定で風で揺れやすい葉の上よりも、幹のほうが安定しているからである。葉は、他の幼虫に食されてしまう心配もある。

虫カゴ（飼育ケース）で幼虫を飼っていると、このようね内壁でサナギになることが多い。蓋の裏側で逆さにぶら下がってサナギになることもある。あらかじめ内壁に画用紙や厚紙（板目）を貼っておくと良いのだが、子どもが家から持ってくる飼育ケースでは、すでにサナギになっていることも多い。

透明な飼育ケースの利点は、外側からでも詳しく観察できる点だ。重要なのは「どうやって自分の体を壁に固定しているか」という点だ。たくさんの糸が壁にへばりついているのがわかる。そこからひときわ太くて丈夫な糸２本で、サナギ自身の体を支えている。このままでも羽化できるが、狭い飼育ケースでは展翅に失敗し、飛べなくなることが多い。この場合「サナギホルダー」にしておいたほうが良い。

蛹化直後は、サナギの体の中は液体状でドロドロなので、移動はしないほうが良い。５日以上たってから、ピンセットで慎重に剥す。まずは尾の部分。サナギ本体は挟まず、サナギを支えている糸の塊を剥す。この時、サナギが暴れることがあるので、注意する。

２本の糸は、できれば切らずに、壁にへばりついている糸の塊ごと、セロテープで剥すのが良い。